六人部是香の著書・手沢本について

田中重太郎

写本・板本を問はず、和本に押捺せられた蔵書印を見てゐると、本と人との関係を思はずにはゐられない。「我死ナハウリテ黄金ニカヘナヽムオヤノ物トテ虫ニハマスナ長沢伴雄蔵書記」の印を押した絡石舎長沢伴雄の多くの蔵書は、伴雄が死ぬまでに罪を得たために、ことごとく紀州藩の没収するところとなり、売って金にかへることができなかったし、「宝とも玉ともおもふ ふる文そわかなき世とてしみにまかすな」の蔵書印を残した藤井高尚の蔵書も子孫の方方のところにそのすべてが伝はってはゐない。

「蔵書は一代」などといふことわざはないであらうが、その人の死後、某文庫と名づけてその蔵書が永く保存せられてゐる場合は、きはめて稀である。わたくしは、一冊の書もない家に生まれ、育って、分不相応の書痴になったが、その蒐書にあたって、いくつも押された蔵書印を通じて、その一冊の本がわが手に入るまでの縁を思ひ、つねに感慨にふけるのである。

一

ところで、ここに国学者六人部是香の著書や手沢本についていささか述べておきたい。それは、縁あってか、数年来是香大人の著書、自筆稿本、書入れ本などを十数点入手することができたから、この機会にその概略を解説紹介し、その道の研究家のお役に立つならばと考へた次第である。

六人部是香の伝記・著書について一冊の書に成したものはないと思ふが、手もとの和歌文学大辞典（昭和三七年十一月　明治書院刊）によると、

> 是香　文化三(1806)―文久三(1863)．一一・二八。五八歳。姓は六人部。葵舎・一翁と号した。山城国乙訓郡向日神社の社家。父節香と共に篤胤に学び、関西における平田派神道の棟梁と称された。孝明天皇に毎月進講を続け、京都に神習舎を興し、向日町には家塾を開いて子弟を教えた。神道と共に歌学にも造詣深く、特に歌格の研究に優れた業績を遺

し、その論著『長歌玉琴』は有名である。

『篤廼木綿垂』長歌集。二巻。自ら考定した長歌の格法に基いて詠んだもので、四季・羇旅・送別・名所及び雑に部立して編集している。又『古今集撰輯考』一巻 嘉永四成・『古今集仮字序真字序論』一巻 嘉永四成・『訂正古今集序』一巻 安政四成 の三書は古今集に関する精細な考証書である。

（一〇九六頁）

とあるが、この項は、白井永二氏の担当執筆によってゐる。関隆治氏編の「国学者著述綜覧」（昭和一八年六月 森北書店刊）によると、

〔名〕是香 〔通称〕美濃守 〔号〕葵舎。〔生地〕京都 〔生〕光格天皇、寛政十年。〔歿〕孝明天皇、文久三年十一月二十八日〔年〕六十六。〔学統〕平田篤胤の門。〔備考〕山城乙訓郡向日神社の神主。京都三本木に徒を集めて皇学を教授す。

〔著書〕産須那社古伝抄広義一巻。篤能玉籤三巻。顕幽順考論一巻。竜田考。長歌玉琴一巻。百人一首峯楓葉五巻。まほのおひかぜ一巻。道の一言一巻。道の一言広義二巻。（慶著和）

と見える。（慶著和）は、「慶長以来諸家著述目録和学の部」の略称である。

右の二書に見える是香の没年齢の相違については、その生年を文化三年にするか、寛政十年にするかによるものであるから、これを調査しなければならない。和歌文学大辞典においても、年表の文久3癸亥の〔没〕のところには、「一一・二八 六人部是香(66)」とあり、「国学者著述綜覧」とおなじである。わたくしが向日神社へ行って、現宮司六人部克己氏におうかがひしたところ、位牌に「行年六十六歳」とあり、文久三癸亥歳十一月二十八日になくなってゐることを教へられた。

六人部是香について、特にその歌学の面について、従来もっとも精細に説かれたのは佐佐木信綱博士の『歌学者としての六人部是香』（明治四一年九月博文館刊「歌学論叢」所収）であらう。この論は、明治四十年十一月の稿であるが、主として古今集に関する説として「古今集撰緝考」（一巻、嘉永四年稿）「古今集仮字序真字序論」（一巻、嘉永四年稿）「訂正古今集序」（一巻、安政四年稿）の三つの論の内容を紹介し、検討せられ、さらに是香の著「長歌玉琴」による歌格論をくはしく解説せられたものである。また、「神於呂之神歌考」一巻、「道の一言」（嘉永六年刊）の紹介をもしてをられるが、前後四十六ページにおよぶ精緻な論である。

佐佐木博士は、六人部是香の生没を「文化三年に生まれ、文久三年に没す 年五十八歳」としてをられる。和歌文学大辞典の解説は、おそらくこれによられたのであらう。『歌学者としての六人部是香』にあげてをられる是香の著書は、佐佐木博士のあるいは、読まれ、あるいは、見られたものに、「顕幽順考論」「大祓詞天津菅麻」「古道本義伝」「挫魔概論」「順考神事伝」「日中神事伝」「産須那古伝抄広義」「道の一言」「賤手巻」「篤迺玉籤」「竜田考」「真帆の追風」「村雲日記」「ひもがたな」「篤迺木綿垂」「長歌玉琴」などがあったが、さらに博士は、六人部家を訪ねて、是香の著述目録中にある「詠歌本論」（三巻）、「上古歌謡要解」（一巻）、「掖古長歌集」（五巻）、「万葉集要解」（三十巻）、「万葉集別釈」（五巻）、「万葉集発語考」（十巻）、「万葉集作者伝」（五巻）など、歌に関する著書を見ようとせられたけれど、これらはそのころすでに六人部家になかったらしく、既掲「古今集撰緝考」「古今集仮字序真字序論」「訂正古今集序」および「神於呂之神歌考」の四点を御覧

になったのである。

佐佐木博士の「日本歌学史」（明治四三年十月初版刊。大正六年十二月増訂版刊。昭和一七年一月改訂版）の第二編「近世歌学」第十三章「歌格の研究の三」にも是香の伝記、和歌に関する著が紹介せられ、特に「長歌玉琴」の解説がくはしく説かれてゐるが、前述の論と大差がない。

二

さて、架蔵の写本・書入本について述べておかう。写本には、是香自筆本と他人の転写本とがあるが、まず是香自筆稿本から紹介して行くこととする。

1　村雲日記　三冊。自筆稿本。縦 23cm、横 16cm。十行罫紙、折り目の下に「六人部蔵」の文字が罫とともに灰黒色で刷ってある。仮綴で題簽の紙はなく、表紙に直接に「村雲日記　上」「むら雲日記　中」「村くものにき　下」と自筆でしるされてゐるが、下冊の「村くものに」とあるのを見れば、ムラクモノニキとよむのであらう。

上冊は、

はかなき花紅葉をめですさびてこゝかしこにあくがれありく事は年ごとの春秋のならひなるを彼よき人のよしといひけん芳野はしも道のほども遠かるうへ我世々つかへまつる向日社の四月（ウツキ）の神（カム）わざにも近かればいと事しげくて日をかさねたる旅路などには得思ひたゝざりしをやう〳〵太郎が人となれるまゝに去年より世をのがれて大原野のかりの庵に住居しつればあらたまりぬる年のはじめより今年はいかでと心ひとつに思ひおきてつるをきさらきついたちばかりあさ見よ〳〵おきいでて見たればそのふにつづく小塩の山々いみじうしろう降つもりたる雪のけしきのおもしろきにもまづ心あてなるかなたの事のみ思ひつづけられて

よしの山まだ見ぬ花のけしきさへこゝろにうかぶけさのしら雪などうちひとりごちしがはつかばかりみやこにものするとてゆぐりもなくやまざくらのさきほころびたるひともとをなん見いでたりけるいとあやしとのみ見もてゆきしが事のえうありて南禅寺なる順正学院にもめしたりしかばそのわたりなる黒谷真如堂さては粟田口などいふ所〻に今を盛と咲をゝりたるにぞこゝろあはたゝしうなりもてきていそぎ庵にかへりて家刀子にもその心を得させつゝもろともに同し月の廿六日といふ日になん旅立ことゝはなれりける……

にはじまる四十七丁は、夫人同伴の旅で、伏見・巨椋（おくら）・井手・木津・奈良・西大寺・薬師寺・竜田・法隆寺・三輪・在原寺・初瀬の諸所をめぐってゐる。

中冊は、

三月朔日けさはきのふの名残もなうはれわたれるにぞ年比心にかけつる天ノ香久山ふみならしてんとてたちいでぬ初瀬ノ町はなるゝ所にあまたの石作りみがきをるはこゝに大鳥居とていと大（キ）なる鳥（ママ）鳥のありつるを近きころやけたりしかばそを作りあ

らたむるなりとぞ……

からはじまる。この冊は、初瀬から桜井・埴安池の址などを経て吉野にいたる紀行、三十八丁ある。

下冊は、

四日けふは滝廻りせんとし彼尾張人とゝもに立いてぬきのふものしつる竹林院の前を南さまにのほりて谷川に渡せる天皇橋といふをわたりたる所にて道ふたすじにわかりたり此ちまたを右にとりてやゝさかしき坂路をのほるこゝまでは家居もまはらに建つゝきたり……

からはじまり、吉野の奥、国栖の里、象の小川、当麻寺、誉田社、仁徳天皇陵などを経て、淀川から長岡天満宮を拝し、「かりの住居なる大原野の庵にぞかへりつきける」とあるが、これにつづいて、

今はいたう年老たまへる母とじのまちよろこひたまふを見るにもまつたひらかにてまします事のいとうれしう此ほとのあらましよみつる歌なとかたり聞え奉りしかは同しくは旅のほとの日なみのおほかたをたにかきとゝめて見せてよとのたまふにもとより古き書ともかんかへあはすへきたづきにもとしるしとめつる日記をとうてゝかきしるしつるすゝろに

よしの山見しは夢路のこゝちしてたとるうつつに残る言の葉

弘化二年三月　　むとへのよしか

とあるにより、これが弘化二年（一八四五）の春の紀行であることがわかる。下冊の丁数は、三十四枚である。

なお、この下巻の右の自署のあとに

竜田考　一巻
畝火考　一巻
芳野考　一巻

この三巻はこれの日記の附録となしぬ

としるしてあるが、このうち、「竜田考」は、嘉永二年三都書林刊となっている。

この架蔵「村雲日記」は、ところどころ朱筆で原文を添削してあり、上冊・中冊に特に訂補が多い。その一例を示すと、既掲上冊第一丁の

道のほども（朱）やゝ遠かるうへ。（朱）桜のはなの咲そむるころにもいたりぬれは
（朱）ミセケチ〔四月〕の　神わざにも近〔か〕ればつきぬ（朱）ミセケチ何くれの〔いと〕
（朱）ども事しげくて……

のごとくである。

佐佐木博士の見られた「村雲日記」は、架蔵の草稿本ではなくて、向日神社に現存する清書本であったと考へられる。なほ、「竹柏園蔵書志」（昭和一四年一月刊）には、「六人部是香集　自筆本　一冊」（嘉永五年一月から同六年九月までの詠草）があり、また、「紀記歌集　六人部是香書入本　一冊刊」（林諸鳥の紀記歌集に、是香が附箋して、自説を記せるもの）「道の一言講義　草稿本　一冊」（是香の講義を人に写させたもので、自ら朱で訂正してある。巻末に「嘉永七年十月廿四日夜記畢」とあり、菅原真人の跋がある。）「村さめ　六人部良香自筆稿本　一冊　小本」（桂園一枝の春部の歌を抄出

して、難評したもので、末尾に自詠がある。）および「和泉式部日記頭註 六人部良香自筆稿本 一冊 大本」（和泉式部日記を筆写し、そのはじめの数丁に頭註がある。これについては、後述する。）がある。

2 仏足石歌 国史歌集 古書歌集 一冊。自筆稿本。縦 27.8cm。横 19.9cm。

本に題簽がなく、無表記であるが、見返しの裏に右のやうに書いてあるので、かりにかう題しておいた。

内容は、はじめの六丁に薬師寺仏足石歌を写して、これに注を加へ、契沖や伴蒿蹊の注を引いている。後者については、

伴蒿蹊か校しおきし石刻本とか云そや仏足石碑銘とある本もて校合しぬそは所〳〵字のかはりあれはなり此本も正面すりなれはこよなきより所となりぬへくおほゆるその傍註も所々かきいれぬ　（是香）花押

文政二六廿五

と朱書してある。

この仏足石歌に対する是香の注には

仏足石の事西洋の地輿（チリ）の事カケル書ニ花蓮（ハレン）印（タイン）帝亜国錫蘭（セイラン）ト云嶋アリ 印帝亜国ハ天竺ナリ 島ノ中央ニアダムスト云高山アリ其高サ凡二十里仏家ニ所謂霊鷲山也ソノ頂ニ少シ平地アリ其中央ニ池アリウエールマルアカントント云ハ功徳池是ナリ……

のやうな興味深いのもある。

第六丁の裏からは、

続日本紀歌　七首、

第八丁の表の後半から

日本後紀歌　十二首、

第十丁裏の二行目から

続日本紀歌　短歌三首　長歌　一首

を写し、校異を示してゐる。

第十五丁裏の後半からは、

日本三代実録歌　一首、

第十六丁表の後半から

古語拾遺　二首、

第十七丁表から

日本国現報善悪霊異記　五首

それぞれ童謡、謡物の類を録して、そのあとに（第十七丁裏）

文化十三年五月廿八日葵屋夕日モル（マトノ）。日影ニ写シヲヘヌ　六人部よしか

第十八丁表から

万葉緯巻第八　洛東隠士　編緝（ママ）

として、以下神楽三十丁にわたって、精細な注があり、真淵、似閑その他の注を引いてゐる。

つぎに、第四十九丁表から

万葉緯巻第八　洛東隠士　編緝

催馬楽を三十二丁にわたって写し、神楽の場合とおなじやうにくはしい注を加へてゐる。そして、その終りに、

是の催馬楽の一巻は己れひとゝせ梁塵愚按抄の本によりて書入

置しをうたひ万葉緯の中なる真字の本をうつしおきつる本にまた書入たるになん此加入の中に古注といへるは彼愚按抄の本なりさるを古注とも梁塵とも書たるはいとみたりかはしけれとそはみな似閑がものせしまゝにに写しぬかつ似閑か考へ置つることの見わきかたきふし〳〵には似閑といふ文字をすゑたり

是香　花押

とある。さらに第八十一丁から

万葉緯巻第九　　洛東隠士　編緝

として、風俗・雑芸・今様その他の歌謡を収めて全三十二丁で終っている。

この本の終りには

文化十三年八月四日写しをへぬ　　六人部是香　花押

とあるが、万葉集は、全二十巻、いふまでもなく契沖の門人今井似閑が万葉集を経として、その緯、すなはち注解のための同時代の横の補助資料集を編み、注を施したものである。似閑の自筆本が三手文庫にあるが、是香がその自筆本によって写したかどうかは疑問である。

是香の自筆でない写本で、架蔵本中、左のやうなものがあるが、これらは、国文学の研究に直接関係のあるものでなかったり、すでにその内容が紹介せられてゐるものであるから、単に書名と巻数とをしるしておくにとどめる。

3　顕幽順考論　五冊　「摂津国造」などの蔵書印がある。

4　日中神事記　二冊　これにも、3とおなじ蔵書印があり、同じ人の写しのやうである。

この本の末尾に、文政十年正月としるされてゐる。

5　篝能木綿垂　三冊　（題簽「篝能木綿垂　上」「篝のゆふして　中」「すすの木綿垂　下」

上巻表紙に是香の筆で「自嘉永元年到（ミセ）同（ケチ）（七）年凡四年」とあり、中巻に「嘉永四年一年」、下巻に「自嘉永五年　至同七年　凡三年　三巻合得歳八年」とある。

6　長歌玉琴　一冊

第一丁に「鏡廼舎文庫」の蔵書印が、末尾（第九十六丁）に、「文久元年十月廿三日（朱）一翁（花押）」とあり、そのつぎに、「為渡辺君以家本一校了（明治十七年三月下旬）　小田清雄」とある。この「渡辺君」は、是香の子である六人部是愛（ちか）氏の門人であった阿部野神社社司渡辺氏のことであらう。

7　大祓詞天津菅麻本論　下　一冊

本書は、3、4とおなじ装幀の写本であり、筆者もおなじ人と考へられる。この書の上巻があったか、どうか、書庫の未整理で判明しない。

三

最後に　是香の手沢本（架蔵）について説いておく。

8　訂正古訓古事記　上下二冊（中巻缺）

上下とも表紙裏に「安布日能屋乃冨美」などの蔵書印がある。題簽は、「訂正古訓古事記　上（下）」であるが、宣長の序文には「新刻（アラタニエレル）古事記之端文（フルコトブミノハシブミ）」とあり、跋文は、長瀬真幸が書いてゐる。下巻末には、「寛政十一年己未五月十日御免享和三年癸亥十月発行　勢州松坂　山口兵助……」の刊記がある板本である。この書の第一丁（礼紙）には、

校目

○伴氏本　コハ真福寺本伊勢本賀茂本等ヲ校合セラレタル本也　伊勢ハ校語ニ伊ト標シタル是ナリ真福寺本ハ標語ナシニ赭ニテ校シタル是也又真ト標シタル伴翁ノ校シ落サレタルヲ今種案カ得タル真福寺ノ摹本ヲ以テ再校シタルナリ

○寛永十五年写本　朱ニテ校語ナキモノ是也伊勢本ハ必ス伊ト標シタルヲ以テ別チ知ルヘシ尤伊勢ハ上巻ノミニテ中下巻ニハナシ

○醍醐殿本　標語ナシ此色ニテ校シタル是也

○神谷克楨蔵本　コレモ標語ナシ

○戸田通元蔵本　校語ト本ト標シタリ

○山田以文校本　コノ本ハ度会延佳神主ノ手沢ノ本ト水戸閤卿（ミツノ）ノ訂本ト又イ本トニテ校シタル本也校語ニ山本マタハ山イ本ヲト、標セリ

○山根輝実校本　コハ伴氏ノ校本ト寛永ノ印本ト学習院ノ御本ト神谷本ト鈴鹿本トヲ以テ校シタル本也但シ神谷本ハ予既ニ校シオキタレハ取ラス鈴鹿本ハ別ニ校シ置タル本アラハ亦トラス学習院御本ハ学ト標シオキタリ

とあり、上巻末に伴信友が文政十年四月に写した「尾張名護屋真福寺所蔵古事記抄出之零紙」の模写があり、花押がある。また下巻末には、校目にあげられた諸本の奥書が写してある。諸本の校合は、きはめて行きとどいてゐる。わたくしは、古事記の本文研究について、まったく門外漢であるが、是香の研究の深かったことが知られる貴重な資料である。

9　古語拾遺　一冊

表紙裏に「安布日能屋乃冨美」などの蔵書印がある。題簽は、「古語拾遺　全」とあり、各丁の柱には「古語拾遺　（丁数）　四宮社板」と見え、「元禄九年十一月　江之近州四宮社司大伴重堅」と刊記がある。

本文二十三丁には、あますところがないほど是香の書き入れ、貼り紙があり、諸本の校合があるが、二十四丁裏の上欄に、

以醍醐家本一校畢書中往々称文本者即是也

于時文政六年六月二十八日　　六人部是香

と自署してある。けだし、この書も、古語拾遺の研究書として、永く残るべきものであらう。

10　菅家万葉集　上下　二冊

上下とも表紙裏に「波伯部百樹蔵」「安布日能屋乃富美」などの印があり、上下とも第一丁に「城戸珍蔵」の蔵書印がある。城戸千楯の蔵であったのであらうか。題簽には、「首書新撰　菅家萬葉集　上（下）」とあり、下巻末に「元禄十二年己卯歳三月吉旦　摂陽大坂心斎橋筋　書肆　保武多伊右衛門梓」の刊記のある板本である。

本書が六人部是香の手沢本であったことはいふまでもないが、どのページにも満紙これ書きこみのありさまで、注の貼り紙が幾重にもなってゐるところがある。加注のすべてが是香の筆によるものであるか、にはかに判定しがたいが、「是香云」「是香按」の文字が随所に見え、その部分が自筆であることは疑を容れない。下巻末に、

文化十三年閏八月廿八日ヨリ同九月朔日迄一古写本校合畢　是香

とあり、さらに「群書類従本校了」「打聴了」「家集五巻了」「同二了」「同三了」などの文字がある。

菅家万葉集の研究に志してゐる人には、こよなき研究文献といへるであらう。

11　古今和歌集　上下　二冊

下巻末に

東都　書物問屋　尾州名古屋本町通七丁目　永楽屋東四郎
江戸日本橋通本銀町二丁目　同　出店
濃州大垣本町　同　出店

の刊記のある、ありふれた板本であるが、この本の書きこみには、佐佐木信綱博士が引かれた「古今集撰緝考」のもとをなしてゐるところがある。これらについては近く森本茂氏からその調査研究の発表があるので、ここにはこの本の所在だけ報告しておく。

以上ながながと六人部是香の著書ならびに手沢本について説いて来たが、是香が神道学者として多くのすぐれた業績を残しただけでなく、歌学、国文学の研究においてもりっぱなしごとを遺して行った人であることをあらためて紹介し、斯道に志す人への参考に資したいと念じてゐる。天理図書館所蔵是香の和泉式部日記（墨附四十八丁）については、吉田幸一博士著「和泉式部研究　一」にくはしいが、柱刻に「和泉式部全集」と木版刷があり、是香にその計画があったことがわかる。この稿本は、もと竹柏園佐佐木信綱博士の蔵であったらしく―これについては、前述した―表紙の左肩にある「和泉式部日記」右肩の「六人部是香　稿本」とある字は博士の筆になる。本文は扶桑拾葉集本を底本としてゐる。

なほ、六人部是香の書翰その他も数点所蔵してゐるが、急遽この稿を書いたため、それらをさがしもとめ得ず、是香の伝記についてもさらにくはしい文献があるかも知れないが、すべて後日を期したい。

この稿を書き終へて後、森本茂、柿谷雄三両氏とともに向日神社へ参って是香の曽孫克己氏におあひし、現存の諸本などを拝見させていただいた。そのとき「かりこものさうし」上下二冊、「小倉百首嶺紅葉」

五冊（各冊「みねの紅葉」「峯のもみち葉」などともある）などをも拝見できた。これらはいづれ両氏から研究発表していただく予定である。

をはりに懇切にお教へくださった六人部克己氏に心からあつくお礼申しあげる次第である。

（本学教授　国文学）

旧号訂補

本誌第九巻第一号（昭和三七年六月刊）所載小稿『清少納言枕冊子の影響文献「尤のさうし」「絵本朝日山」「吉原大鑑」について』の論において、「絵本朝日山」の初版（元文六年版）（一七四一）が入手できず、やむなく明和九年（一七七二）版（三冊本）と万延元年（一冊本）版（一八六〇）とによって飜刻し、解説しておいたが、最近元文版を手に入れることができた。明和版と彼此対照してみるに、表紙の紙模様は異なるが、題簽の字体はまったくおなじであり――地色は異なる――、内容の絵の部分もおなじであるが、上巻の序文が明和版に一ページ本文六行しかなかったのにかかはらず、元文版は、一丁二ページにわたり、十四行におよぶ点、それに明和版にない凡例が一ページある点が異なってゐる。また、下巻末の跋文は、その終りの三行が異なってゐる。いま、元文版の序文・凡例の全文、および跋文の全文と刊記とをここに飜刻して旧稿を訂補しておきたい。思ふに、明和版は元文版の序文・凡例を削ったものであるが、この元文版の序文によって、わたくしの解釈に苦しんだ「此三巻……」の跋文の意が氷解したのはうれしい。まことにおそるべきは、後人のさかしらであり、後刷本のわがままである。なほ、跋文は、六行目からが異なってゐる。

六人部是香の著書・手沢本について

上巻　第一丁　表

画本朝日山

前聞少納言は清原元輔の女にて上東門院にめしまつわされ才賢世に絶倫女房にぞありける

それが後〳〵讃岐にすまゐける頃むかししたはしく都のゆかしきあまり自かきつらねをきたる草子の中より情に切なる詞どもを撰み絵になんうつして朝日山と題し鄙のつれ〳〵を消遣けるとぞ予此言の見まくほしく

第一丁裏

年月おもひ居けるに此ほど他のもとにて古物語集など見侍る中不図此三巻を見あらはしければいみじうれしく思ひて独見んもそう〴〵しからんこと人にも見せてしがなと更に其絵を今様の筆にあやなし侍りぬ猶おゝやけに伝て蘭閨の弄ものともならばふみのはやしのさいはゐおほきのみ

みなもと　折江撰

第二丁表

凡例

○此書全清女のかきあつめおける本にして画図もふるびおもしろく最殊勝なればその儘にて木にちりばめおこなはんこそ本意ながら虫ばみ或はきえうせし所も

六人部是香の著書・手沢本について

数〳〵なれば其代の模様を今にうつして詞のみとり
来つゝ画図をいまやうにあらたむるのみ
○絵を今やうにせしかば時代のたがひおほくて道風の
筆といふ朗詠集の嘲のがれがたけれども天王寺の鳥居
を朱にいろどるも見ものにかふるのはたらきあ
ればとがめもあらじと唯絵そらごとの諺にのがれ
ぬしかはあれど見ん人よく〳〵用捨ありて虚実を
わきまへたまへかし

下巻第九丁裏

此三巻は清女手沢の存する処の古ざうし
なりけるを折江君なる人もち出ていかにや
今やうの絵にうつして世の児童にも
見せてしがなと頻の求めいなみがたく時と事
とのたがひおほきはかへり見もせず詞によせの
せちなるさまのみ筆にまかせて少納言の
昔を今につぎぬ見ん人〳〵此こゝろだに
しり給はゞさのみとがめもあらじと筆を
かいやりぬるのみ

京師画工　西川祐信　印

同　第十一丁表

平安城　六角通柳絲軒　堀川通玉技軒　寿桜

元文六年　辛酉　青陽花朝日

堀川通高辻上ル町　京師書坊　植村藤右衛門
通石町三町目角　江府書林　植村　藤三郎
高麗橋壱町目　浪華書舗　植村　藤三郎

なほ、この元文版の序文によって、「絵本朝日山」の表題が枕冊子の左の文に由来してゐるとも考へられるが、どうであらうか。もちろん、左の文は、清少納言のことでなく、讃岐国のことではないが。

御乳母の大輔の命婦、日向へ下るに、賜はする扇どもの中に、片つ方は日いとうららかにさしたる田舎の館など多くして、いま片つ方は京のさるべきところにて、雨いみじう降りたるに、「あかねさす日に向かひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすらむと」

と御手にて書かせたまへる、いみじうあはれなり。……

（日本古典全書　第二二六段）

「朝日山」といふ地名は、讃岐国に実在するかどうか、調査しなければならないが、手もとの辞書の類には見えない。朝日の出る山、朝日を見る山の意か。ともかく京都をなつかしんでゐる。（仲田勝之助氏の「絵本の研究」にも題名の由来には触れてゐない。）

（本学教授―国文学）